



## 浦島太郎を題材にした番外謡

金春月報八月号23ページの円満井戸端会議、本屋禎子さんの記事を見て、私はさほど「抜かれた!」とは思いませんでした。

数学教育が専門の本屋先生は以前から、浦島伝説の海底の竜宮と陸上の人間界で時間の進行速度が違う話がアインシュタインの理論では成立する事の研究と啓蒙に力を入れ、六月頃には、円満井戸端会議の記事より詳細なレポートを頂いていたからです。

また、番外謡『浦島(水の江の浦島)』及び、その改作である『竜神浦島』の本文は戦前から活字化されていて、専門家にとっては珍しい事ではないからです。

それに、別に私に『浦島』を復曲して上演する予定が有り、その途中で関連記事が漏れたという訳では無く、私は、変体仮名の草書の本文を楷書にして、複雑かつラフな原本の節附をただそのまま写しただけで、強吟か和吟かも明示していない状態で、文学的・民俗学的研究には使えても、このままでは素謡で謡うにも不完全な段階です。

でも、これを良い機会に、久しぶりに法政能研に赴いて、強吟か和吟かスムかニゴルカを調べて、素謡として謡えるように整理する事も悪くはないと思っております。

『浦島』自体は廃曲に成りましたが、現行曲の本文の処々に引用され、室町時代に浦島伝説が世間一般に普及していた事が判ります。

開けて悔しき浦島が(海人)。浦島がこの箱根寺にて明け暮れ悔しと(小袖曾我)。

本屋先生のアインシュタイン論をキツカケに、次のような例も有る事に気付きましたが、それについては、本屋先生のグループに任せます。「半日の客たりしが、七世の孫に逢う」という中国の故事(鳥追船、七騎落、石橋、木賊、満仲)